

## 中世後期における伊予守護河野氏と島嶼部領主 忽那氏および二神氏の趨勢

著者	佐藤 正隆
雑誌名	国史談話会雑誌
巻	53
ページ	25-56
発行年	2012-12-21
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00127075">http://hdl.handle.net/10097/00127075</a>

# 中世後期における伊予守護河野氏と島嶼部領主

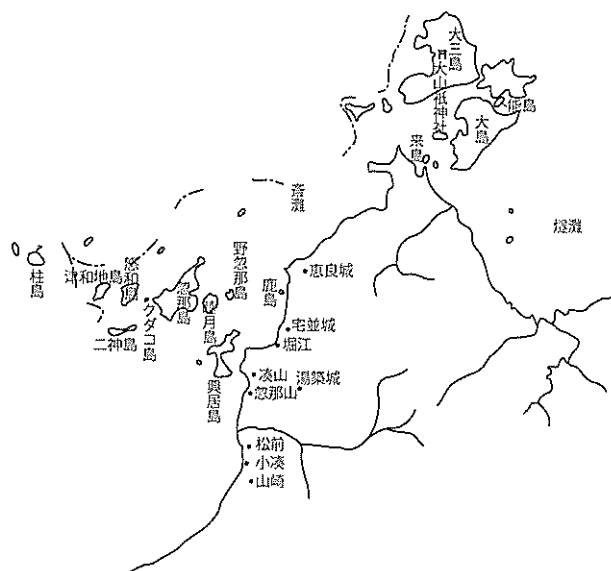
—— 忽那氏および二神氏の趨勢 ——

佐藤正隆

はじめに

伊予国忽那七島は忽那島（中島）、野忽那島、陸月島、怒和島、二神島、津和地島、柱島からなる諸島であり、中世において忽那氏と二神氏という二つの領主がこの地で権勢を振るった。忽那氏はその名の通り、忽那島を本貫の地としていた一族である。同氏について、「忽那系図」「忽那島開発記」は藤原道長の後裔であり、この地に配流された親賢を起源としているが、親賢なる人物の存在は他の史料から確認できず、実際は平安時代に島を開墾した開発領主だったと考えられている。<sup>1)</sup>

鎌倉期より地頭御家人として一次史料に名が現れ、南北朝期に忽那義範が、時に北朝方の勢力と干戈を交え、時に西下する懷良親王を島内に迎えるなど、南朝方として自立的に動



いた時期をもって同氏の最盛期とされている。ところが、やがて河野氏に従属するようになると、忽那氏はそれまでの自立性を失って力を弱め、戦国期以降、同七島内の二神島を本拠とした二神氏が忽那氏に取ってかわって島嶼部で勢力を張るようになる。

この二神氏というのは、長門国の有力御家人であった豊田氏をそのルーツと言われているものの、二神島に移住した時期については諸説あり定かではない。同氏は室町期から近世初期にかけてまとまった文書群を残している。

この忽那氏・二神氏に関する研究であるが、いまだ十分に踏み込まれていないように思われる。まず忽那氏に関して、専ら同氏の最盛期である南北朝期に主眼を置いて研究がなされており、室町期以降の同氏については概説的に論述されることが多い。管見の限りこれに詳細な検討を加えている研究は、南北朝期から室町期にかけての忽那氏の従属過程を考察した山内治朋氏、忽那氏の自立的側面について強調した小林可奈氏の論稿があるのみである。史料の少ない室町期以降の忽那氏を考察の対象としている点で大きな成果であるといえる両論文であるが、残念なことに時系列に沿った観点を欠いている。守護の傘下に入ったことを契機として、忽那氏は被支配者として変質してもくわけてあるが、そういった変質がいつ、どのように、何をきっかけにして起こったか、そ

して最終的に、いかにして二神氏にとって代わられたか、検討を加える余地が多分にあるように思われる。

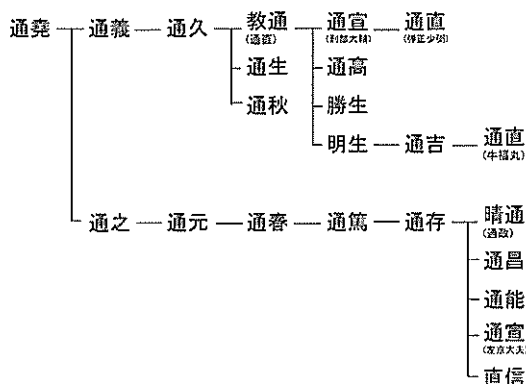
また、二神氏については、景浦勉氏の論考を除いて他に詳細な先行研究はほぼ見当たらず、『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』でも僅かに触れられているのみであり、その動静については不明な点が多い。景浦氏は研究が進んでいない理由として、系図の問題上、一次史料に見える人物を比定するのが困難なことに加え、二神氏がいくつかの庶家に分かれるためにその関係を把握しにくいことを挙げている。いまだ手つかずとなっている二神氏の動静を追うには、既存の系図に頼らず一次史料から系譜を再現するよりはかにないだろう。

本稿では以上に提示した研究上の課題を踏まえた上で二つの領主について見てゆくことにより、直接的には伊予守護河野氏と島嶼部の国人領主との関係を明らかにし、大局的には島嶼部に本拠を置く領主に特有の性質について一つの可能性を提示する。

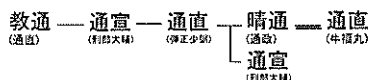
## 第一章 忽那氏と伊予の争乱

先述した通り、室町期以降、忽那氏は守護河野氏との主従関係を深化させる。そのために、独自の動きを史料上ほとんど見せなくなる。つまり、裏を返せば室町期の忽那氏を見るにあたって、守護の動静も眼中に入れないならぬとい

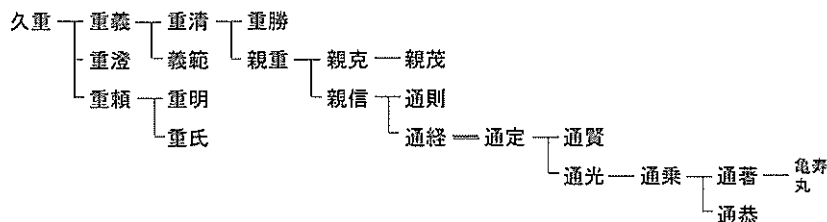
## 河野氏略系図 (『予陽河野家譜』より)



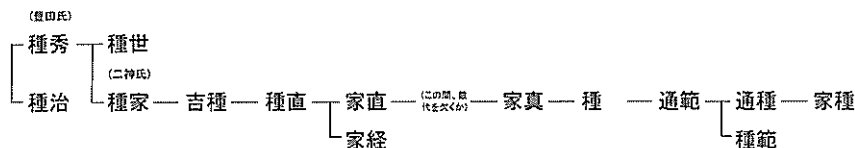
※ なお川岡勉氏・西尾和美氏は注32著書で教通以下の系図を以下のように修正する



## 忽那氏略系図 (『忽那系図』より)



## 参考：二神氏略系図 (注2景浦勉氏著書より)



うことになる。  
 中世後期の河野氏は数ある守護大名家の例に漏れず、跡目をめぐる内紛、そしてそれに伴う領国内の動乱という、守護権力にとって危機的な時局に面する。こういった不安定な時期を見てよくにあたって、河野氏の当主ごとに便宜的な時期区分(Ⅰ期 教通・通秋大輔)期、Ⅱ期 通宣(刑部大輔)期、Ⅲ期 通直(彈正少弼)・晴通期)を設け、その内部事情と結びつけながら忽那氏の動向を追う。

# (一) 河野教通・通秋期へ二期——争乱と忽那氏の動員——

## i 文安く寛正期の守護家分裂

忽那氏が河野氏へ従属するきっかけについて記された一次史料はない。ただ、『忽那島開発記』には足利義満の仲介によって忽那通則は河野氏の配下となったとある。二次史料の性格上、これを鵜呑みにするわけにはいかないが、河野氏の通字である通の字を通則の代から用いていることから、このころ従属への転機があったとみてよいだろう。この通則の跡を継いだと思われる通経の代に、河野氏が忽那氏に対して比較的多く安堵・宛行を行っていることが伺える。このころが主従関係の黎明期であろう。本節で扱うのはその次代の通定、さらにその次代の通光の頃である。

まず、当該時期の河野氏的情勢について触れておきたい。

永享七年(一四三五)、当主通久の戦死を受けて、その跡を嫡子大正丸(のちの教通)が継ぐこととなる。教通が跡をついで早々、永享十一年(一四三九)の永享の乱の際には美濃へ、同年、大覚寺義昭の乱の際には吉野へ、嘉吉元年(一四四一)の嘉吉の乱では播磨国へ、と立て続けに国外出兵が命じられる。それが一段落するやいなや庶子家通春が反抗を始め、惣領・庶子両家の軍事衝突が始まる。

文安元年(一四四四)四月、小早川氏に対し教通への合力を催促する畠山徳本(持国)発給の幕府御教書が、両者の軍

事衝突が起こっていたことを知る事の出来る史料の初見である。この書状には教通の相手方が通春であることは記されていない。しかし、このころ幕府は畠山氏管領期には教通に合力するよう周辺勢力に働きかけ、細川氏管領期には通春に合力するよう働きかけるという姿勢をとっていたことから、この小早川氏への催促は教通・通春の対立に関するものと見て差し支えないだろう。文中に「既於所々及合戦之上者、不廻時日致進發」とあるので、四月時点で既に合戦が諸所で展開されていたようである。

ちょうどこの翌月、忽那氏が教通より四松名田に加え、山崎・小湊・松前をまとめて宛行われている。時代は下るが戦国期に、堀江を中心とした三津・松前にかけての海岸一帯の地域は、河野氏によって城下町湯築の外港とされるようになる。このことから忽那氏が宛行われた松前・小湊は海事な面で十分機能しうる土地であったと推測される。まだ従属してから年数が浅い、いわば外様の勢力である忽那氏にこういった重要な地域を教通が与えたのは、河野惣領・庶子の軍事的衝突により同氏の持つ海上軍勢力の必要性が高まったために他ならない。

では、この忽那氏の海上軍勢力はどのように使役されていたのだろうか。このころ河野氏による動員の具体的事例が確認できるのは、文正元年(一四六六)の恵良城合戦のみであ

る。しかし、年次不明七月二三日の忽那通賢宛の河野通秋書状における「国之事取しつめ候ハムかい分可加扶持候、しんる仁等相共仁致忠節候ハム、肝要候、いささか不可有等閑候也」の文言、および、寛正六年（一四六五）九月三日の忽那通光宛の河野通生書状における「昨夕□□御出陣かへ御身小袖二長刀給へく候」といった文言により、このころ忽那氏が河野氏によって一度ならず軍事的動員を受けていたことが伺えよう。

このころ、通春を援助する形で河野氏の内紛に介入していた細川勝元が、大野氏・森山氏・重見氏などの伊予国内の「山方」領主に通春方に同心するよう働きかけていたのであるが、教通が忽那氏と積極的に結びつこうとしたのは、こういった通春方の動きに対するものであろう。伊予に限ったことではないが、こういった国人勢力は頻々と立場を変えうる存在であった。I期を通じて河野惣領家による忽那氏に対する安堵・宛行が頻繁に行なわれるのはそのためであらう。年次不明十二月一六日の忽那氏に宛てた教通書状にある「数年之忠節至今無二成候事あるへからず候」という一文が、両者の関係がまだ不安定であったことを表している。

この後、寛正五年（一四六四）に、同盟関係にあった通春と細川勝元が決別し、河野宗家と庶子家の和睦を経て、もともと河野氏の内訌であったものが、河野両家と細川勝元の対

立へと展開してゆく。当時管領であった細川勝元は幕府権力の下、吉川氏・小早川氏・出羽氏・毛利氏・大内氏といった諸勢力に通春討伐令を出すのであるが、大内教弘・政弘父子は命に背いて興居島に渡海し通春の支援に回る。この興居島は忽那島から程近い場所に位置し、忽那島からまっすぐ松前・小湊方面へ渡る際には、興居島付近を通過することとなる。こういった地理的關係は、通春支援に回った教弘・政弘の渡海に忽那氏が関与していたという川岡勉氏の推測を裏付けるであらう。対立の様相が変われども、忽那氏の海勢力は変わらず動員され続けていたのである。

## ii 応仁の乱と伊予

このように国内外の勢力をも巻き込む騒乱が続く最中、畿内では応仁の乱が勃発する。当然河野氏もこれに関与してゆくのであるが、『予陽河野家譜』と『築山本河野家譜』の間で、乱に際しての河野氏の動向について記述が食い違っている。前者は教通が西軍につき、通春は東軍についたとする一方、後者には教通についての記載は無く、通春が西軍についてたとしているのである。そのため、このころの教通・通春の動きに関してはいくつかの見解が存在する。

諸先行研究を見てゆく前に、確かな点を整理しておきたい。第一に、河野通春は応仁元年六月から七月頃に大内政弘

に従って上洛したという点である。「河野」が政弘に従って上洛したと記載されている史料がいくつかあり、河野氏の誰かが上洛したことは確かなのであるが、この「河野」が庶子家通春のみを指すのか、惣領教通も含むのかという点が争点となっていた。しかし、少なくとも政弘と友好関係にあった通春はこれに従軍したとしている点で諸先行研究は共通しており、これには異論を差し挟む余地は無いように思われる。

二つ目の点は、遅くとも文明五年までに教通は東軍についていたということである。これは文明五年（一四七三）、当時東軍側であった足利義政によって、教通が伊予守護職に補任されていることから明らかである。元々、教通は河野惣領家として伊予守護を継いでいたのであるが、康正元年（一四五五）に細川勝元によってその職を奪われている。長禄四年（一四六〇）には教通自身が幕府に申状を提出し、河野氏代々の由緒を書き並べた上で、伊予守護や豊後国臼杵・近江国馬渕の恩賞地を「如元預御成敗」するよう幕府に求めていることから、守護職復帰は教通の手てからの悲願だったことを伺い知る事ができよう。

以上の二点から、このころの河野氏の動静を見てゆく上でポイントとなるのは、応仁の乱の勃発から文明五年の守護復帰までの間の教通の動きということになろう。この点に関して、古くは長山源雄氏の論稿に、史料の根拠が無いものの、

状況から考えて教通は東軍に味方したという説がある。また、景浦勉氏の論稿では教通も通春同様、政弘に従って上洛しており、両者競合しながらも西軍についていたと述べられている。石野弥栄氏は、教通は旗幟鮮明にせず在国したとする。山内譲氏は以上三氏の先行研究をまとめた上で、詳細な検討を加え、教通は旗幟鮮明にせず在京する一方、伊予国内の指揮は弟の通生が守護代として執っており、その後文明元年（一四七九）頃に教通は帰国したとする。川岡勉氏は山内説に概ね賛同しつつも、教通の帰国年次を文明元年より早い時期としている。

山内氏の詳細な研究から、乱の勃発時、教通は旗幟鮮明にしないまま在京し、その後、いずれかの時期に帰国したと見るべきだろう。となると、論点とすべきは山内説と、そのそれに修正を加える川岡説の相違点、つまり教通の帰国年次となる。これについては忽那氏の動きも絡めつつ、後で詳しく検討してゆく。

では、応仁の乱勃発に際しての忽那氏はどう動いていたのだろうか。『予陽河野家譜』では、細川方として参戦した通春に従って上洛した中の一人に「忽那」の名前がある。しかし上洛した通春が、忽那氏に対して「同心」を求めたと思しき書状である【史料一】が存在することから、この記述は誤りであろう。実際には忽那氏は上洛せず、伊予にあって態度

を明らかにしていなかった可能性が高い。

【史料1】河野通春書状<sup>(35)</sup>

就御進退事、大内新介進状候、此時分有御同心被致忠節候者本望候、此子細連々申候へく候、旁以都鄙被任新介之儀候者、至已後可然存候、所詮不日可有現形候、此方又無餘義等閑之上者、可承子細等、不可有隔心之儀候、委細者此使者可申候、恐々謹言、

(付箋)「河野伊予守若名九郎」

正月廿五日 通春(花押)

忽那新右衛門尉殿

この文書の発給年次は不明だが、大内政弘への同心を求めている事を根拠としてか、『鼎史』は大内政弘上洛後の応仁二年に比定している。これと同じく年次不明であるものの、応仁二年正月二五日発給に比定されている平岡房景・房近発給の書状にも通春に同心すべき旨について記されている。

【史料2】平岡房景・房近書状<sup>(36)</sup>

伊予守殿給人近日御不和之様言及候、無勿躰候、御心中定其子細候哉、雖然御在京後留守と申其堺事又肝要之時節と申、御方無御心元候、早々為御方被抽忠節候ハてハ不可叶

候、我々申承候之様上船存知事候間、且者當方内儀をも承及候分申計候、尚々早速夜形御左右可待申候、如此之心中も承ハ無沙汰之様候間、不願斟酌毎事期後信候、恐々謹言、

正月廿五日 房景(花押) (付箋)「平岡采女入道」

房近(花押)

忽那新右衛門尉殿

御宿所

文中にある「御方」は通春方という意味だろう。また、差出人である平岡氏は浮穴郡在原城を本拠とする国人である。平岡氏と忽那氏の間主従関係があったとは考えにくい。にもかかわらずこの文書に用いられているのが切紙である事を考えると、奉書の形式こそとっていないものの、【史料2】は実質的に通春の意の下で出されたものであり、平岡房景・房近は通春の奉行としてこれを作成したのではないだろうか。文書の作成のみならず、これを京から伊予の忽那氏まで届け、忽那氏の返事を京の通春の元まで取り次いだのも房景・房近だとすると、文中の「我々申承候之様上船存知事候間」も整合的に理解できるだろう。

川岡勉氏は以上二つの書状に関して、通春の在京・留守のために給人の間に不和が生じていることを伺える史料として【史料2】を挙げた上で、これに動揺した忽那氏が京内氏を



介して進退の保証を求めたために、大内政弘が通春に遣わした書状が【史料1】にある「状」であるとしている。<sup>④</sup>これは【史料1】冒頭の「御進退」を忽那氏の進退と解釈したことによるのであろうが、前述の通り、この直前まで河野宗家との結び付きを強めていた忽那氏が、教通やその代官である通生を差し置いて、わざわざ通春や他国の大名である大内氏に保証を求めるであろうか。この両文書について、少し深く掘り下げて考える必要がある。

そもそも、両文書が応仁二年発給のものと確定できる要素は無い。【史料1】においては、大内政弘と通春が協調して行動している点、【史料2】においては通春が在京している点から、両文書とも通春が京で政弘と行動を共にしていた時期、つまり応仁元年六、七月から遅くとも文明九年ごろまでのものとは考えられるのであるが、<sup>⑤</sup>年次を文面からのみ特定することは不可能である。【史料2】に「不願斟酌毎事期後信候」とあることから、通春サイドはこの頃、しばしば忽那氏に対して合力するよう働きかけていたことが伺える。【史料1】【史料2】は同年同日発給のものである可能性が高いが、そうではなかったとしても、応仁の乱勃発直後より始まった、通春による一連の働きかけのうちに位置付けられるべきものである。

ここで【史料1】の「申其堺事又肝要之時節と申」に着目

してみたい。この「堺」とは忽那氏の在所、つまり忽那七島を指している可能性が高い。在京する通春は畿内から離れたこの場所が「肝要」とだと述べているのであるが、それはなぜであろうか。

一つ可能性として考えられるのは、少貳氏や大友氏といった九州勢力の存在である。文明元年ごろ、少貳頼忠・大友親繁ら九州勢力は細川勝元と結び、九州の大内領を侵すようになったことが知られている。<sup>⑥</sup>大内政弘と通春が結び付いている以上、伊予・九州間の海域で軍事的緊張が高まったとしてもおかしくはない。大分時代は下るが、永禄八年（一五六五）五月以降、大友義鑑配下の諸将が伊予へ渡海し、松前・今津・垣生など道後地方の浦へ上陸し河野方と戦っているように、九州から道後地方への侵攻は想定されない事ではなかったのである。通春は九州勢の動きを危惧し、忽那氏への合力を持ちかけたのではないだろうか。

さて、合力の話が持ち上がっていたのは通春―忽那間だけではなく。通春―教通間にもこのころ合力の話があったことを示す史料がある。

【史料3】泰綱書状<sup>⑦</sup>

於摂州合戦、色々籌策定祝示給候、大慶候、仍合力之事承候、如何様急度談合仕可致奔走候、如何候、京都時宜重而

聞合候者可承候、恐々謹言、

二月十八日 泰綱判

(河野通生)  
兵部少輔殿

予州領地之面々へ同前

【史料4】河野教通書状案<sup>(4)</sup>

於摂津国合戦色々聞へ候間、無心元之処、定説承候、目出候、仍而合力之事尋候き、令談合仕候て可奔走申候、委細尚弥三郎被申候間、令省略候、恐々謹言、

二月十八日 教<sup>(通力)</sup>

(河野通生)  
兵部少輔殿

山内讓氏が【史料3】を【史料4】の添状とみなし、【史料3】の差出の泰綱が【史料4】の弥三郎と同一人物である可能性があるとしているように、日付と文面の一致から両文書は関連して出されたものと見てよいだろう。『県史』では、両文書ともに発給年次は応仁二年に比定されている。その根拠となったのは、両文書に見られる「摂州（摂津国）合戦」であろう。長山源雄氏はこれを『大日本史料』応仁二年正月二四日にある摂津諸郡攻略と同一のものとしている。『大日本史料』に引かれているのは、東福寺僧正雲泉太極による記録である『碧山日録』の「正月二十四日甲申、辰而雨下、西

軍政弘之兵陷攝州諸郡云」という記述である。このことから二四日の時点で合戦は終わっており、その報が京都までもたらされていた事が伺える。

さて山内讓氏と川岡勉氏が教通帰国年次について異なった見解を示していることについては先に触れたが、その分岐点となっているのは【史料3】【史料4】の解釈なのである。

山内氏は【史料3】の宛所「予州領地之面々」から、京都の教通から伊予の通生へ送られたものとしている。その一方川岡氏は、河野氏の文書の発給主体が、このころ守護代通生から教通へ移っていることを指摘した上で、【史料4】から、教通はこの時期より先に帰国し、それと入れ替わりで通生が在京するようになったとする。つまりこれが伊予の教通から京都の通生へ宛てられたものであると比定しているのである。氏がそう比定する根拠は明示されていないが、おそらく【史料4】の文面において畿内で起きた摂津合戦について伝聞した旨を記してあるためなのである。

両書状について、山内氏は内容に深く触れる事はしていないが、改めて文面を見てゆくと、どちらも摂津での大内勢の勝利を「大慶」「悦」と歓迎した上、「仍合力之事承候」とし、通生に「奔走」するよう命じていると解釈できる。ここでは明らかに摂津合戦と合力が関連付けられているのである。このことから、この合力というのは、教通と摂津合戦で時宜を

得た大内政弘・通春との合力と見る事ができよう。前後関係を推測するに、かねてから教通は通春・大内政弘よる合力の誘いを受けていたものの、それには乗らず旗幟不鮮明を貫いていたが、大内勢有利のこの期に合力の話を受ける意志を明らかにし、その旨を通生に伝えたのが【史料3】【史料4】なのではないだろうか。

以上のことを受けて、通春ないしは政弘のもとへ「奔走」し「談合」するよう命じられている通生は、この書状が出された応仁二年二月の時点で彼らと同じく畿内に居なければいけないことになる。このことから、川岡説を取るのが妥当であるように思われる。摂津合戦をきっかけとして、「合力」への動きが加速したのではないだろうか。

ここで、合力への転機が摂津合戦であったことを念頭に置きつつ、先の通春から忽那通光に宛てられた【史料1】を解釈してみた。仮に『県史』の通り、応仁二年発給とするならば、この書状は先の『碧山日録』の記事の翌日、つまり京までその報がもたらされて間もないころに発給されたものとなる。そうすると、文書の冒頭、川岡氏が忽那氏のそれと採っていた「御進退」は大内政弘の摂津合戦での戦果ととれ、政弘が「進状」たのは合戦での戦果について通春に知らせるためであり、その知らせを受け取った通春が、大内方に戦果のあった「此時分」だからこそ「有御同心被致忠節候者本望

候」と忽那氏を説得しているものと解釈できるだろう。「旁以都鄙被任新介之儀候者、至已後可然存候」と少々オーバーだと思われる表現が用いられているのも、大内政弘が今まさに勢いに乗っている時分ゆえ、と説明がつく。【史料1】における通春―忽那間の交渉もまた通春―教通間でのそれとほとんど同じ動機をもって進められていたのである。

この後、両者の談合は拗れたのであろうか。それから一ヶ月もたたないうちに、通春が直接国許の教通へ同心するよう説得している。

#### 【史料5】河野通春書状案<sup>河野</sup>

久雖不申候、以事之次令啓候、抑天下之劇都鄙延々之様二候間、更以無覚悟候、御同心候哉、就中先年大内方重見内務少輔以申下候旨、于今同前候、其後其方之一途不預御返事候条、罷過候、仍上意之事御兄弟之儀に候間、不可有差異候歟、殊今度就<sup>（河野）</sup>接州合戦之時宜、餘国補任之子細共候、於家名者可為同篇候歟、先以此時分有御同心、且家□起、且国を被重候様に、御了簡尤肝要候、委細面々可申候、恐々謹言、

三月五日 通春（花押影）

刑部大輔殿進之候

翌文明元年六月に西軍方の斯波義廉が伊予国人大野氏に対し、河野惣領家通秋・通生の討伐を命じており、また、その後すぐに教通は東軍に属すようになった。このことから両者の決別は決定的なものとなったことが伺える。

最後に、両家決別にともなう忽那氏の動きを見ておきたい。【史料1】【史料2】に見た通春の危惧が現実のものとなり、文明二年（一四七〇）二月に、東軍と結んだ大内政弘の伯父である左京大夫入道道頼が太友親繁の援助を受けて長門国で反乱を起こした。小林可奈氏によると、この反乱の際、忽那氏は道頼・親繁方を支援したという。小林氏は忽那氏の自立性という論点からこの事実を述べられているが、この出兵は東軍方となった教通の意を汲んでのことだろう。

以上、応仁の乱の前後を通して忽那氏は河野宗家と去就を共にしていたことを明らかにした。南北朝期、帰属を替えながら自在に動いていたころの面影はこのころすっかり薄れてしまっていたのである。しかしで述べたように教通が忽那氏の離反を危惧していたことや、iiで述べたように通春による合力交渉において河野宗家に対する交渉と忽那氏による交渉が同列に進められていることから見て、河野両家の当主は忽那氏にいくばくかの自立性を見出していたのではないだろうか。しかし、次期になると河野宗家―忽那の主従関係にこ

べてゆきたい。

(二) 河野通宣（刑部大輔）期（Ⅱ期）―忽那島の直轄化―  
 応仁の乱終息後も、帰国した教通・通春によって争いは続けられたようで、文明十年（一四七九）、惣領家との戦いに際し、通春が大内政弘に対して援軍を要請している。文明十四年（一四八二）に通春が死去し子の通篤へ、明応九年（一五〇〇）には教通が死去し子の通宣（刑部大輔）へと、両家は代替わりを経る。河野氏の文書発給主体として両者が並存していることから見て、両家対立は規模を縮小しつつも存続していたことは確かであろう。

さてこのころ通宣から忽那通乗に宛てられた文書は僅かに二通である。通宣の死去が永正一六年（一五一八）であり、通宣が当主であった期間が短かったせいもあるが、【表1】の次期（Ⅲ期）発給のものと併せて見てみると、Ⅱ期を堺に河野―忽那間の文書が激減していることは明白である。

次にその文書の内容に注目してみたい。忽那氏当主は通定・通賢・通光の三代に渡って、河野宗家より本領安堵と東浦検断職を安堵されているのだが、通乗の代にはその両方が見られなくなり、代わりに忽那氏本領であるはずの忽那島内に存在すると思われる五名の代官職が安堵されている。

もちろん通乗に対する安堵状・宛行状がたまたま残らな

【表1】河野氏発給忽那氏宛文書一覧

(典拠:『愛媛県史 資料編 古代・中世』 以下の表も同じ。なお人物・年代の比定については、私見により若干の訂正を加えた)

	発給年月日	文書名	差出	知所	主な内容、記載 (断りがない場合は忽那家文書)	紙	歴史
I	1	正平2(1367).12	河野通直(通称)軍勢催促状	通直(河野通直)	忽那親重(重直)	軍勢催促	堅切 889
2	応永12(1405).9.12	河野通之宛行状	対馬守(河野通之)	(忽那次郎左衛門入道)	久津郡崎西浦上分増頼職 (能高兼知行分)の宛行	堅	1161
3	応永21(1414).10.15	河野通久安堵状	越智(河野通久)	忽那六郎次郎(通経)	本知行安堵	堅	1168
4	応永24(1417).12.9	河野通元宛行状	(河野)通元	忽那六郎次郎(通経)	久我六郎左衛門名田・大内 光永名田の宛行	堅	1192
5	応永25(1418).9.3	河野通久安堵状	(河野)通久	忽那六郎次郎(通経)	忽那崎内の本知行半分の安堵	堅	1195
6	応永26(1419).10.29	河野通元安堵状	(河野)通元	忽那六郎次郎左衛門尉 (通経)	久津郡崎本知行・御本(久) 郎本部三郎名田・同久我六 郎左衛門名田(同別府角 名田を除く)・大内九郎三 郎名田の安堵	堅	1199
7	応永26(1419).10	河野通久安堵状	刑部大輔(河野通久)		忽那崎内三崎社・八幡社領 の安堵	堅	1202
8	応永26(1419).10	河野通久安堵状案	刑部大輔(河野通久)	(長陸寺)	長陸寺領の安堵(長陸寺文書)	(堅)	1203
9	? .10.29	河野通元書状	(河野)通元	忽那六郎次郎左衛門尉 (通経)	久津郡崎東分後断職の立入につ いて	折	1200
10	? .10.29	河野通元書状	(河野)通元	かうの池 なかし	南禅門の渡船について	切	1201
11	? .10.29	河野通元書状	(河野)通元	忽那六郎次郎左衛門尉 (通経)	10とはば同一内容(後編葉 家文書)	堅	1193
12	文安1(1444).8.19	河野教通安堵状	(河野)教通	久津郡	四松名田・山崎・小波・松 前の宛行	堅	1277
13	文安1(1444).8.29	河野教通安堵状	(河野)教通	久津郡因幡守(通定)	久津郡崎東分の安堵	折	1280
14	文安1(1444).9.6	河野教通安堵状	(河野)教通	久津郡因幡守(通定)	久津郡崎東分後断職の安堵	折	1281
15	文安5(1448).3.17	戒能通明安堵状	戒能通明	忽那又九郎(通賢)	河野教通の成敗に任せ忽 那有恒名田を安堵すべき旨	折	1289
16	長祿3(1450).2.10	河野通生宛行状	(河野)通生	忽那九郎二郎(通賢)	桑原枝重(在和氣を除 く)・行正一様の宛行	堅	1354
17	長祿3(1450).6.1	河野刑部大輔宛安堵状	刑部大輔(通伏?教通?)	忽那次郎左衛門尉(通賢)	本知行安堵	堅	1357
18	長祿3(1450).6.1	河野刑部大輔宛行状	刑部大輔(通伏?教通?)	忽那次郎左衛門尉(通賢)	河野崎内宛安分・同得能肥 前分の宛行	堅	1358
19	寛正5(1464).7.23	河野通伏安堵状	刑部大輔(河野通伏)	忽那次郎左衛門尉(通賢)	忽那崎東分かん人職の安堵	折	1395
20	? .7.23	河野通伏書状	刑部大輔(河野通伏)	忽那次郎左衛門尉(通賢)	国内を取り組めば扶持料を 加える旨 等閑無きよう取 り計らう旨	折	1396
21	寛正6(1465).9.3	河野通生書状	(河野)通生	忽那新右衛門尉(通光)	前略により小袖・長刀を給 う旨 更断等について 野 崎留田を渡すべき旨	堅	1417
22	文正1(1466).4.10	河野通生安堵状	(河野)通生	忽那新右衛門尉(通光)	忽那崎東分決断成敗の安堵	折	1421
23	文正1(1466).7.11	河野氏奉行人奉書	正岡雄孝	忽那新右衛門尉(通光)	本知行半分の代地として丹 山崎内得地頭領の安堵	折	1426
24	文正1(1466)? .11.12	河野教通感状	(河野)教通	忽那新右衛門尉(通光)	惣良城合戦の感状	折	1460
25	応仁1(1467).8.22	河野氏奉行人遣書奉書	(正岡)雄孝 河野通親	忽那新右衛門尉(通光)	惣良城合戦の恩賞として出 作所子分の安堵	折	1428
26	応仁2(1468)? .1.25	河野通音書状	(河野)通音	忽那新右衛門尉(通光)	大内政弘への同心を求める旨	切	1433
27	? .1.25	平岡房基・平岡近道宛書状	平岡房基 平岡房近	忽那新右衛門尉(通光) 御留所	通音捨人の不和 通音の在官 通音に忠諭を尽くすべき旨	切	1434
28	応仁2(1468).2.12	河野教通安堵状	(河野)教通	忽那新右衛門尉(通光)	忽那崎東分後断職の安堵	折	1437
29	応仁2(1468).2.12	河野教通安堵状	刑部大輔(河野教通)	(新右衛門尉(通光))	忽那次郎左衛門尉(通賢)跡 の所領の安堵	堅	1438
30	? .12.16	河野教通書状	(河野)教通	三内口前 忽那新右衛門尉(通光)	所領についての申し合わせ 「最年之次館至今無二成」 の事への懸念	堅	1439
31	文明6(1474).1.22	河野通直(教通)宛行状	刑部大輔(河野教通)	忽那新右衛門尉(通光? 通果?)	因永湯月分の宛行	堅	1472
32	文明6(1474).3.29	河野通生置文	(河野)通生		置文 河野通久宛給書状 (3・5・7)を要す	堅	1478
33	? .6.29	河野通生書状	(河野)通生	忽那新右衛門尉(通光? 通果?)	支那寺のことについて(長 陸寺文書)	折	1479
34	? .1.26	河野通里書状	河野通里		忽那崎内の築城に關しての 人権大限	折	1480
35	? .4.30	河野通直(教通)宛行状	(河野)通直(教通?)	矢野口右衛門尉 忽那新右衛門尉(通光? 通果?)	施製城へ渡らすべき旨	折	1515
36	? .7.20	通基(河野教通)宛行状	通基(河野教通)	忽那三郎	前所のことについて	堅	1552
II	37	明応8(1499).12.7	河野通宜(刑部大輔)宛書	(河野)通宜	賀嶋兼中	堅	1566
38	文亀4(1504).2.9	河野通宜(刑部大輔)安堵状	(河野)通宜	忽那新右衛門尉(通果)	国貞・本長・友行・直松・ 未武分・平の安堵	折	1589
39	永正2(1505).12.4	河野通宜(刑部大輔)安堵状	(河野)通宜	忽那新右衛門尉(通果)	忽那五名代官職の安堵	折	1595
40	大永1(1523).11.29	河野通直(御正少卿)宛書	(河野)通直	忽那新右衛門尉(通果)	国教寺一町改修と被官一人 の諸公事の免除	堅	1630
41	大永3(1525).8.17	河野通直(御正少卿)安堵 状案	(河野)通直	前侍者禪師	長陸寺住持職と寺領の安堵 (長陸寺文書)	(堅)	1642
42	享祿3(1530).6.13	河野通直(御正少卿)宛行状	(河野)通直	忽那新右衛門尉(通果)	二神谷次郎知行分の宛行	堅	1661
43	天文10(1541).6.13	河野通直(御正少卿)書状	(河野)通直	護山宗中	三崎兼中崎免状につき等 を留めるべき旨	堅	1711
44	天正7(1579).4.20	河野通直感状	(河野)通直(牛乳丸)	忽那龜丸九	花顔合戦における感状(予 陽河野家領)	?	2234

【表2】 戦国期の二神文書(二神文書、吉木二神文書、片山二神文書)

	発給年月日	文書名	発出	宛所	主な内容、記載 (断りがない場合は二神文書)	紙	年代
I	1	文明11(1479).12.13	河野通直(教通)宛行状	刑部太極(河野通直)	二神四郎左衛門尉	(風早郡)紫井安岡名、同友兼名、宮崎分の宛行	整 1486
	2	文明13(1481).8.3	高山通貞取状	高山通貞	二神左衛門四郎	文明八年分の風早郡御手作分役銭を納めた旨	整切 1499
	3	文明15(1483).2.3	忽那通秀地頭職・寺社領注文	忽那通秀	中務	忽那島西方地頭の領領、寺社領の注文(古本)	整 1505
	4	文明18(1486).3.26	重見通昭安堵状	(重見)通昭	二神式部丞	二神道金入道陸日懸願職の安堵	折 1530
	5	? .10.9	平岡房見書状	(平岡)房見	二神式部丞	平岡公事について重見通昭の命に待つべき旨	折 1531
	6	長享3(1489).2.5	(河野教通力)安堵状案	河野通直刑部太極(教通力)	二神藤左衛門	二神尊前守の跡を本人佐が継ぐべき旨(古本)	(整) 1539
II	7	文龜1(1501).8.6	今岡通忠・村上吉重安堵状	今岡通忠 村上吉重	藤田中務	忽那七嶋の奥奥惣しき旨先規の如く遣仕すべき旨(古本)	整 1577
	8	永正3(1505).3.5	今岡通忠・村上吉重安堵状	今岡通忠 村上吉重	藤田神左衛門尉	西之浦社役中務手次、津和地地頭中職の安堵(古本)	折 1596
III 備後院	9	永正17(1520).10.26	河野通直(御正少弐)宛行状	(河野)通直	二神藤二郎	(風早郡)紫井安岡名、同友兼名、宮崎分を教通書状(=I)に任せて安堵	整 1625
	10	? .2.10	河野通直(御正少弐)感状	(河野)通直	二神藤二郎 二神藤左衛門尉	吉州道前中に小松中侍の取忠	整 1626
	11	? .4.17	河野通直(御正少弐)書状	(河野)通直	二神藤二郎	柳原五左衛門尉について	整 1627
	12	?	河野通直(御正少弐)官道書出	(河野)通直	二神藤次郎	左馬助	折 1628
	13	? .8.21	河野氏奉行人進啓奉書	通倫 孫 龜 朝(直方)監印	二神弥五郎	四郎左衛門と和泉守の所領について	整 1687
			天文11(1542) 天文期の守護家分裂				
	14	天文11(1542).3.28	河野晴通安堵状	(河野)晴通	二神弥五郎	安岡分、宮前分、友包入地の宛行	整 1718
	15	天文13(1544).11.16	河野通直(御正少弐)官道書出	少弐(河野通直)	二神弥五郎	兵部助	折 1745
	16	天文14(1545).2.26	河野通直(御正少弐)宛行状	少弐(河野通直)	二神兵部助	河原分之内内町を松本和泉へ宛行	折 1748
	17	天文14(1545).6.16	河野通直(御正少弐)宛行状	御正少弐(河野通直)	二神左衛門尉	忽那入部人橘宮主様の宛行	整 1749
	18	天文14(1545).6.16	河野通直(御正少弐)宛行状少	御正少弐(河野通直)	二神兵部助	紫井庄内安岡分、宮前分、友包分の宛行	(整) 1750
	19	天文14(1545).6.16	河野通直(御正少弐)宛行状	御正少弐(河野通直)	二神孫右衛門尉	河原分を正張寺々を修き宛行(古本)	整 1751
	20	天文15(1546).7.1	河野通直(御正少弐)宛行状	御正少弐(河野通直)	二神年人佐	親父信濃守領地所従の安堵(古本)	整 1753
	21	天文16(1547).3.18	河野通直(御正少弐)宛行状	少弐(河野通直)	二神源二郎	和加部一部之内内町の宛行(古本)	折力 1759
	22	天文20(1554).2.28	河野通直(御正少弐)宛行状少	(河野)通直	二神兵部助	二神嶋作職の安堵	(整) 1773
	23	? .7.1	河野通直(御正少弐)書状	(河野)通直	二神兵部助	二神嶋に子細中侍	切 1774
	24	天文21(1552).8.28	河野通直(左京大夫)宛行状案	(河野)通直	二神左衛門尉	(風早郡)紫井郡役職の宛行(古本)	(整) 1779
	25	天文21(1552).11.17	河野通直(左京大夫)宛行状	(河野)通直	七並二神兼中	(高野郡)鴨部郡新田分を前田九郎知行分の所とす(古本)	整 1780
	26	天文21(1552).11.18	河野通直(左京大夫)宛行状	(河野)通直	二神源三郎	(和氣郡)久枝郷之内友近名の宛行	整 1781
	27	? .10.20	河野通直(左京大夫)書状(前欠)	(河野)通直	二神孫右衛門尉 其他兼中	敵方が今日動いた旨 明日早朝人数を差し遣わすべき旨	整 1782
	28	天文21(1552).11.24	河野通直(御正少弐)宛行状少	少弐(河野通直)	二神兵部助	二神源三郎分の宛行	(折) 1783
	29	弘治3(1557).8.16	村上通康書状	(村上)通康	二神年人佐 其他兼中	東方本々について(古本)	整 1814
	30	永祿6(1563).1.18	河野通直(左京大夫)官道書出	(河野)通直	二神弥五郎	補官 左馬助	折 1902
	31	永祿6(1563).9.5	原兼重安堵状	(原)兼重	藤田中書	久津那大入部宮修理田の安堵(古本)	整 1921
	32	? .8.27	村上通康書状	(村上)通康	二神(藤)左衛門尉	早く参上すべき旨	切 1987
	33	永祿13(1570).12.1	河野氏奉行人進啓奉書案	(平生)盛周 (平岡)房実	二神修理進	村上通直に對面せざるべき旨 平岡房実父子に對面せざるべき旨 勿論べき旨、その他所願同様のことをと計九か案	(整) 2105
	34	永祿13(1570).12.1	河野氏奉行人進啓奉書案	(平生)盛周 (平岡)房実	二神年人佐 其他兼中	33とはほぼ同文(古本)	(整) 2107
	35	永祿13(1570).12.13	河野牛福(通直)安堵状案	河野牛福(通直)	二神年人佐	酒の安堵、紫井三分五貫兼中職中(古本)	(整) 2109
	36	—	二神氏文書案	—	—	6. 21?、35?を写す	整 2110
	37	元龜2(1571).3.4	河野牛福(通直)宛行状少	牛福(河野通直)	二神左馬助	高田儀公分の宛行	(整) 2112
	38	天正8(1580).1.25	河野通直役名書出	(河野)通直	二神相生	役名 弥五郎	折 2244
	39	? .3.28	二神修理進書状	二神修理進	弥五郎	御書油断無く肝要に候旨など	切 2245
	40	? .2.2	二神修理進書状(後欠)	二修(二神修理進)	?	赤まり赤まり無沙汰いたした松之案、筆染まり候	整 2246
	41	天正10(1582).2.25	村上元吉書出	(村上)元吉	忽那嶋寺社百箇中 津和地二神年人佐	忽那七嶋に對し費國給の禁止、番人・出入百姓の禁止など(古本)	整 2302
	42	天正12(1584).2.14	河野通直役名書出	(河野)通直	二神龜松	役名 源四郎	折 2410
			天正12.4 来島村上氏越前方へ謀反				
43	—	二神氏文書案	—	二神修理進(四道とも)	—	天正12.11.10(大友)義統書状、年改不問2.15(長祿)書状、天正10.5.19(村上)通直書状、同年6.晦日通直書状を写す(古本)	(整) 2440

った可能性も考慮に入れなくてはならない。しかし、通兼に對する忽那島五名代官職の安堵を、忽那島の河野直轄領化と石野弥栄氏がみなしているように、このころやはり河野氏による忽那氏への統制力が強まっていたと思われる。その要因として考えられるのは、やはりⅠ期において立て続いた戦乱に忽那氏が動員されたことなのではないだろうか。伊予本土への軍事的動員を通して、山内氏・小林両氏が指摘するような忽那氏の対岸地域（道後地方沿岸）への拠点の移動にますます拍車がかかり、その結果、陸上の権力たる河野氏の膝元へより深く取り込まれていったのだろう。

また、河野通宣は明応八年（一四九九）、鹿島（史料上は賀嶋）衆にも捷書を出している。山内讓氏はこの鹿島衆の起源を、忽那島から程近いクダコ島（<sup>55</sup>）の海域に在番していた忽那氏の配下（<sup>56</sup>久田子衆）に求めている。クダコ城はその地理的關係から、忽那島の支域的な機能を果たしていたであろうと推測されるのだが、そういった存在がこのころ伊予本土に近い鹿島に移っていた上、忽那氏ではなく河野氏惣領から緊急のない捷書を直接受けているのである。ここにもまた、守護の権限強化を見る事ができよう。

（白）河野通直（彈正少弼）・晴通期（Ⅲ期）——忽那から二神へ——

永正一六年（一五一九）に通宣が病死すると、その跡を嫡子通直が継ぐ。文安ごろに勃発し先代まで続いていた内紛が祟ってか、このころになると守護権力の衰退が見られるようになる。その兆候として大永三年（一五二三）には配下の国人正岡経貞が、享禄三年（一五二九）には重見通村が反乱を起こしており、また伊予国外からも天文八年（一五三九）には細川持隆の侵攻、九、十年には大内氏配下の白井房胤が中島（忽那島）や大三島などに襲来するといったように、まさに内憂外患の時代であった。そういった中、通直はしきりに幕府へ贈答を行い、家臣団統率および領国支配のために將軍の權威をかりようと腐心するようになる。こうして守護権力が不安定な局面を迎えていた天文期、その内部では再び分裂が生じるのである。

応仁の乱に際しての記述同様、天文年間、河野氏内部対立に関する記述にも『予陽河野家譜』と『築山本河野家譜』で食い違いが見られる。『予陽河野家譜』によると、後嗣に村上通康を推す通直と、庶子家で通篤の孫に当る晴通（當時は通政。のちに晴通に改名するのだが、以下改名後の名で統一する）を推す家臣団との間で対立が起った結果、湯築を追われた通直・通康は通康の本拠である来島へ逃れ、その後、

両者の間に講和が結ばれたため通直は帰城。晴通は早世し、弟の通賢（のちの通宣）が跡を継ぐも幼少のため通直が後見したとある。その一方、『築山本河野家譜』には、通直と長子晴通が対立し、晴通に居城を攻められた通直は通康に伴われて来島に一時退避するも、通康の奮戦により湯築城へ復帰。その後両者の講和が成り、遠ざけられた晴通に代わって次子通宣が跡を継いだとある。双方とも河野氏が通直・来島通康方と晴通方に分裂して争ったと記している点で共通しているものの、前者はこれを惣領・庶子の対立とし、後者は父子の対立としている点に相違がみられる。

川岡勉氏はこれに関して、天文十一年（一五四二）を期に文書の発給主体が通直から晴通に移りその後すぐ通直に戻っていることから、家譜の示すような通直の追放と復権は確かに存在したとし、同年幕府が河野氏の「父子不睦」を仲裁しようとしている書状が存在する事から、通直・通晴を親子とする『築山本河野家譜』の記述の方が信憑性が高いとしている。

この河野氏の内乱について、寺川仁氏は親大内派の通直・親大友派の晴通という図式を示し、それを批判して川岡氏は反大内派の通直・親大内派の晴通という図式を示す。異なる図式を示す両氏ではあるものの、外交方針をめぐる当主の分裂に家臣団の分裂も伴っていたとしている点で共通している。となれば、河野氏に深く臣従しつつあった忽那氏も一連の騒

乱と無関係ではいられなかったはずである。

この騒動を見る上で着目したいのは、『南行雜録』に収められている「彈正少弼通直御下衆少々記焉」である。この文書には、河野通直の配下の人物が衆ごとに列挙されているのであるが、その成立年次は記されておらず、その性格も不明である。石野弥栄氏はこれを天文期における河野通直（彈正少弼）の家臣団をあらわすものとし、当時対立関係にあった通晴に属する勢力はここに記されていないのではないかと推測している。この史料の中に「下島衆」として忽那新右衛門（通乗）らの名が見られる。石野氏の推論に従うならば忽那氏は通直方についていたことになる。前述のとおり、天文九年に大内氏配下白井氏が忽那島を攻めているのであるが、この翌年に忽那配下と思われる湊山衆に、通直より「三嶋衆中嶋発炎」につき警戒すべき旨が言い渡されていることからすると、忽那氏は通直方だったのではないだろうか。通直方の忽那氏の本拠が大内方の攻撃対象となっている以上、通直が大内氏と対立していたとする川岡氏の示した図式の方が整合的であるように思われる。

さて、『表1』に明らかなように、このころ河野氏による忽那氏への発給文書が次第に見られなくなっていく。その一方、『表2』に示した二神文書を見てゆくと、Ⅲ期において忽那氏と入れ替わるように、二神氏への安堵・宛行が増加し



ていることが伺える。忽那氏の衰退に代わって二神島を本拠とする二神氏が台頭することについては既述したが、その転機となったのはこの天文期の河野氏内乱なのではないだろうか。

とりわけ二神氏への安堵・宛行が集中の度合いが甚だしいのは、天文一四〇二年ころ、通直からの安堵・宛行であり、八年間に年次の分かっているものだけでも一通の書状を確認する事ができる。一度家臣に反旗を翻された通直は、復帰後間もない時期に二神氏、中でも特に二神弥五郎（兵庫助、左馬助）なる人物に急接近したようである。この人物については後に詳しく触れたい。

この時期、河野通直・来島村上通康と二神氏間の接触を確認できる史料はそれだけではない。近世の地誌によって、鹿島城主が通康、城代が二神豊前守だった時期がある事が知られているのである。

来島村上氏が鹿島城主だったことが一次史料で確認できるようになるのは通康の子得居通幸の代からである。しかし、この通幸と二神氏の間には幾ばくかの関係が認められる事から、先に挙げた近世地誌の記述も否定しきれないと山内譲氏は指摘している。Ⅲ期において鹿島衆（旧久田子衆）が河野氏に直轄化されつつあったことについては先にも述べた。来島村上通康というのが、後に自身の実子を河野氏当主に据え

るまでの権力を持つようになる人物であることからすると、鹿島における河野氏↓来島村上氏・二神氏という勢力転換を見ることができよう。鹿島におけるこの転換は、七島における忽那氏から二神氏への転換と対応するものなのである。

#### 四 忽那氏のその後

さて、二神氏に取って代わられた忽那氏はその後どうなっていたのであろうか。Ⅳ期以降、一次史料にこそ忽那姓の人物の名はほとんど見られなくなるものの、『予陽河野家譜』を中心とした編纂物において、戦国末期の河野氏滅亡まで軍事動員を受けている様子が伺える。個々の記述を鵜呑みにはできないが、同氏がそのまま衰退・消滅したわけではなく、二神氏に取って代られてもなお頻繁に動員されるだけの軍事力を持っていたのだらう。

注目すべきは『予陽河野家譜』永禄八年の記事に忽那通乗が銜山城を居城としていた、とある点である。銜山は現在の忽那山に比定されるのだが、そこへ忽那氏の惣領が在城していたということは、忽那氏勢力の対岸地域への移動が戦国後期に至ってますます進行したことを意味しよう。銜山城が忽那氏の居城であったことを確かめられる史料として、他に『伊予古蹟史』がある。近世成立のこの史料には、通乗およびその子の通著がここを居城にしたという記述があるのだ

が、やはりこれを裏付ける一次史料は皆無である。しかし山内治朋氏の指摘の通り、仮にこういった編纂物の記載が誤りだったとしても、その誤記の背後には忽那氏が道後側伊予本土沿岸地域への進出に<sup>関与</sup>していたという認識が含まれていたと考えることはできる。

とはいえ『予陽河野家譜』を見る限り、戦国後期になっても忽那氏は依然として村上氏らと同様の「島方」に区分され、海上軍事力を有している事が伺える。二神氏が七島において勢力を伸ばしたとはいえ、戦国末期まで忽那氏は「島方」領主としての特性を有していた。水軍的特性は残しつつもウェイトを対岸地域に傾けることによって元来の自立性は失い、守護権力に使役されやすい形態へ変化したのである。

先に述べたように、こういった変化の原因となったのは、応仁の乱前後の河野氏の内部対立によって忽那氏の持つ軍事力の必要性が高まった事であった。忽那氏は河野惣領家に深く従属し、その要請に応じて対岸地域へ接近、その後、天文の河野氏内訌をきっかけとして忽那氏の影響力の減退した七島において二神氏が台頭してくるのである。

さて、本章ではその二神氏について見てゆきたい。

## 第二章 二神氏の隆盛と戦国末期の島嶼部

最初に述べたように、二神氏に関しては系図に不明な点が

多い。本章ではまず系譜類に頼らず一次史料を根拠として二神氏系図の再構成を試み、それを踏まえた上で新たに島嶼部において台頭することとなった二神氏の趨勢について検討してゆく。

なお、二神氏関連の文書は三ヶ所に分かれて伝わっている。一つは二神島に伝わった「二神文書」、一つは松山市の対岸地域に伝わった「片山二神文書」、一つは中島（忽那島）の吉木に伝わった「吉木二神文書」である。これらの史料に二神氏の人物の名が見られるのであるが、同時期の史料でもそれぞれの文書群ごとに見られる人物名に相違がある。これら三つの文書群はそれぞれ、中世において分派した別系統の家に伝わったものであろう。

以下ではこの三つ文書が伝えられた二神氏の系統を、それぞれ便宜的に本島流・片山流・吉木流と名付けて論を進める。なお、このうち政治的動向の乏しい吉木流に関しては、紙数の都合上割愛することとする。

### (一) 二神氏の系譜

#### i 本島流

ではまず二神島に伝わった「二神文書」から見てゆく。「二神文書」は全四巻、五十三点の文書からなっている。うち「二神文書一」「二神文書二」には主に安堵・宛行関連の

文書が収められ、「二神文書三」「二神文書四」には主に年貢課役関連の書状が収められている。<sup>24</sup>二神氏の政治的動向のみならず島内の様子も知る事ができ、中世瀬戸内の島嶼部を知る上で貴重な史料であるといえよう。

前半の二巻を見てゆくと、風早郡粟井の安岡名・友兼名を河野氏当主より数度安堵されており、また一度没収された後、「還補」されている例もあることが分かる。<sup>25</sup>忽那氏にとつての本領安堵・東浦検断職安堵と同様、この二名は二神氏にとつて重要な意味合いを持っていたと推測される。ここが誰に相伝されているかを見てゆく事で、本島流の中心人物の系譜をある程度追う事が出来るはずである。

【表2】を見ると分かるように、四郎左衛門尉↓藤二郎（左馬助）↓弥五郎（兵庫助・左馬助）と安岡名・友兼名が安堵されている。血縁について、四郎左衛門尉→藤二郎間の血縁は不明であるが（年次の隔たりから考えて、間に数代挟む可能性もある）、藤二郎→弥五郎間については、天文二〇年に河野通直（弾正少弼）から兵庫助（弥五郎）へ宛てられた安堵状に「二神島作職之事、任親父左馬助知行之旨、進退不可有相違之状如件」とあるので、両者が父子であることが分かる。藤二郎（左馬助）への二神島作職の安堵状は現存しないが、実際は安堵があったこともまた文面から伺えよう。もしかすると四郎左衛門尉の代から安岡・友兼名と併せて二神

島作職も相伝されていた可能性もある。ともあれ、遅くとも藤二郎・弥五郎の代、戦国中期頃にこの系統は二神島内で勢力を張り、在地の農民を統括していたのである。

では、弥五郎以降の系譜はどうであらうか。これ以後については所領の安堵から追う事は出来ないが、その他の河野氏発給文書の宛所から追う事が出来る。年次不明ゆつき（河野通直（牛福丸）の母）書状の宛所は「さまの介との」「しゅりと」となっている。<sup>26</sup>左馬助を名乗っていることを確認できるのは藤二郎・弥五郎の二人であるが、「しゅりと」に関しては永禄→天正年間に修理進を名乗っている人物が確認できるので、この人物に比定されよう。またこのことから「さまの介との」は永禄年間にその名を確認できる弥五郎のことであると推定される。当時の二神流当主や五郎と共にゆつき書状に名を併記されている修理進は本島流において弥五郎に次ぐ地位をもっていたのだろう。後述するように、天正のころ大友義統と提携しつつ、河野氏に反逆した来島村上氏の通総を援助している事から、この修理進は弥五郎の後に本島流を継ぎ、守護家に対して自立的な動きを見せた人物であらうことが推測される。

河野氏滅亡後の天正十五年（一五八七）八月十八日、戸田勝隆の命で検地のために二神島に入ったと思われる佐藤兵吉・多馬久吉から「しゅりと」の「弥五殿」へ年貢の勘定に

ついでに書状が出されている。<sup>(87)</sup>「しゅりともの」は修理進であろうが、「弥五郎」は先の弥五郎ではなく、天正八年に「弥五郎」の仮名書出を通直（牛福丸）より受けている相生に比定される。史料上確認できる年代が修理進のそれと重なることから、相生は修理進に次ぐ地位にあったのかもしれない。

天正一二年に二神亀松なる人物が「新四郎」の仮名書出を通直（牛福丸）より受けているのだが、この新四郎と同一と思われる人物が、近世初頭のものと思われる達書に二神村の代表者として筆印を捺している。<sup>(88)</sup>二神氏は近世以降帰農したことが知られている。新四郎の代にはすっかり本島流二神氏は百姓身分になっていた事がうかがえよう。

以上述べてきた本島流の系譜を再度まとめると、四郎左衛門尉↓藤二郎（左馬助）↓弥五郎（兵庫助・左馬助）↓修理進・弥五郎（相生）↓新四郎（亀松）というようになる。同氏は天文期に急速に台頭していった弥五郎（兵庫助・左馬助）の代に全盛を迎え、戦国末期、修理進の代に自立的な動きを見せるものの、その後近世初頭にかけて武士身分を失うのである。

また、網野善彦氏も指摘するように、「二神文書三」「二神文書四」の中に、二神島の年貢が「二神殿（島内の作職を持っていた本島流当主のことか）」のみではなく、「村上殿（能島村上氏）」「今岡殿」にも納められていたことを示す注文が

ある。<sup>(89)</sup>このことを示す史料の初出は永正二年（一五〇五）で、終出は永禄元年（一五五八）であり、二神藤二郎・弥五郎の時代と重なる。この父子は能島村上・今岡となんらかの關係を持っていたのであろう。能島村上氏も今岡氏も河野氏配下の水軍的領主として知られている一族なのであるが、忽那氏の力が衰退した七島海域に少しずつ影響力を及ぼすようになった両氏に対し、二神氏は自領からの収入の一部を納める事で協調を計ったのではないだろうか。

## ii 片山流

次に「片山二神文書」について見てゆきたい。同文書は全十通からなっており、本島流の「二神文書」に比して分量が圧倒的に少ない。以下、片山流の系譜を追ってゆきたいのであるが、本島流における安岡名や友兼名のような相伝の所領をここから見出す事は困難である。そこで、官途名を手がかりにその系譜を追ってゆきたい。

「片山二神文書」において、隼人佐の官途が宛所となっている文書が四通見られる。少なく見積って、隼人佐の官途を持つ人物は二人（長享期の隼人佐と天文・永禄期の隼人佐）存在する。前者の後、間に数代は喜んで片山流の当主となったのが後者なのだろう。

また、弘治三年（一五五七）村上通康書状の宛所に、隼人

佐と並んで「其外御衆中」とある。<sup>(8)</sup>同じく「片山二神文書」に「宅並二神衆中」という集団が宛所になっている文書があることから察するに、「其外御衆中」にはこの「宅並二神衆中」がふくまれていることが推定される。

この宅並衆とは、七島の対岸地域に位置する宅並城を本拠地とした二神氏配下の集団と推測される。二神氏の系図によると、いつのことは不明であるが種直なる人物が宅並城に移ったとある。系図の不備については既述したが、二神氏の一族が島嶼部から宅並に移り、ここで組織するようになったのが宅並衆である可能性は高い。「其外御衆中」という宛所の文言から、片山流二神当主である隼人佐と宅並衆は主従の關係にあったことが伺えよう。

また、年次不明十月二十日書状にて、今日敵が動くという話を聞いたので、明日「人数等」を遣わすよう、河野通宣（左京大夫）から孫右衛門と「其外衆中」が命じられているのである。<sup>(9)</sup>この孫右衛門と同時期の文書に見られる当主と思しき隼人佐との關係は不明であるが、片山流の中心的人物であろうことは確かである。これに対して本島流の人物から片山流の人物に対して何かしらの命令が出されている例はない。つまり、片山流は本島流の支配下にあったわけではなく、直接河野氏に従属していたのである。

さて、以上のことを念頭に置き、【史料5-1-a】【史料5-1-b】

を見てゆきたい。

【史料5-1-a】河野氏奉行人連署奉書案<sup>(10)</sup>

一上意之儀、来嶋被相背上者、向後牛松丸江御對面有間敷候事、<sup>(11)</sup>

一房実父子旁江於向後、無別心可被仰談事、<sup>(12)</sup>

一河野郷反役職、各江可被仰付事、

一土屋分、同秋光分、可被進事、

一田坂神助知行分、正岡東分可被進事、

一栗上分事、

一難波正岡間二五拾貫分可被進事、

一彼五ヶ所者未給之旁江可被進事、

一各本衆并者、御進退之新給次目之御判不可有相違事、右

之條々、旁急度於御忠節者、無相違可被仰付者也、

永禄十三年

十二月朔日

盛周<sup>(13)</sup>  
房実<sup>(14)</sup>

二神修理進殿

【史料5-1-b】河野氏奉行人連署奉書案<sup>(15)</sup>

一上意之儀、来嶋被相背上者、向後牛松丸へ御對面有間敷候事、<sup>(16)</sup>

一房実父子旁江於向後、無別心可被仰<sup>(17)</sup>事、

一河野郷反役職、各へ可被仰付事、  
 一土屋分<sup>（土屋）</sup>■<sup>（土屋）</sup>光分可被進事、  
 一田坂神助知行分、正岡東分可被進事、  
 一粟上分事、  
 一難波正岡間二五拾貫分可被進事、  
 一彼五ヶ所者、未給之旁江可被進事、  
 一各本衆并御進退之<sup>（亦）</sup>■<sup>（亦）</sup>目之御判不可有相違事、右之  
 條々、旁急度於御忠節者、  
 無相違可被仰付者也、

永祿十三年

十二月朔日

二神修理進殿  
 其外宅並衆中

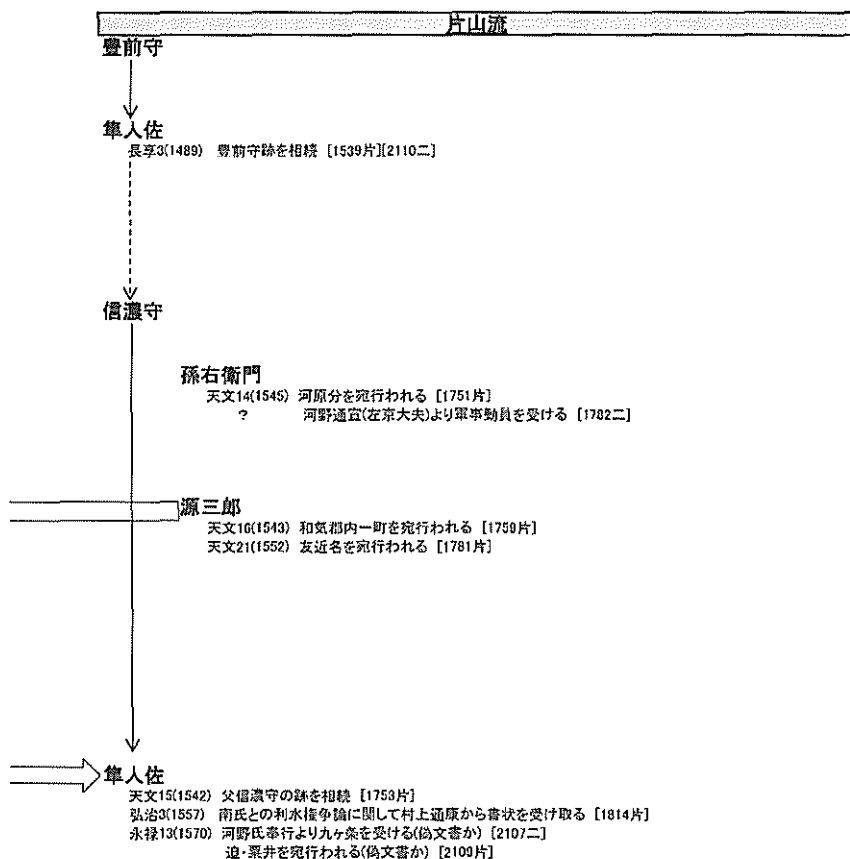
盛周<sup>（盛周）</sup>  
 房実<sup>（房実）</sup>

【史料5-1-a】は「二神文書」にある文書案で、【史料5-1-b】は「片山二神文書」にある文書案である。その文面から、両文書は同一の正文を写したものと考えられるのであるが、諸所に差異が見られる。一番大きな差異は宛所、【史料5-1-a】で「修理進殿」となっているものが、【史料5-1-b】では「修理進殿」が見せ消ちとされ、「準人佐殿」に訂正されている上、【史料5-1-a】には無い「其外宅並衆中」の名が記されている点であろう。これを書写の際の単なる誤写とみなす事も

出来ようが、「二神文書」にある案の宛所の修理進が当時の本島流の中心人物であり、「片山二神文書」にある案の宛所の準人佐が当時の片山流の中心人物でありかつ宅並衆が片山二神氏の配下にあったと考えられる点、また同年発給の文書に同じような事例がもう一組あることから（永祿十三年十二月の迫・粟井三分廿五貫に関する河野牛福（通直）安堵状で、「二神文書」にある文書案の宛所が「修理進殿」となっており、「片山二神文書」にある文書案の宛所では「修理進殿」が見せ消ちとされ「準人佐殿」に訂正されている<sup>(8)</sup>）、この宛所の相違は意図せざるミスからくるものではないのではなからうか。どちらかの案文には作爲的な改作を加えられた可能性、すなわちその背景に両系統の対立の存在した可能性を指摘できよう。自己の領有権の正当性を主張するために、どちらかの流派が偽文書を作成したのでは無いだろうか。対岸地域を本拠とする片山流はもちろんであるが、対岸の領地を相伝していた本島流も「河野郷反役職」「粟井三分廿五貫」といった権益に興味を持ったとしても不自然ではない。

以上、少々煩瑣であったが両系統について系譜の再構成を試みた。文中では触れなかった人物も含め、二神氏の人物の相關關係を図示したものが【表3】である。不確定要素が多くまだ存分に議論の余地はあるが、ひとまず本稿ではこの相關關係に則って論を進めたい。

## 人物関係図



[ ]内の数字は『県史』の史料番号。二＝二神文書、片＝片山二神文書、野＝野坂文書

【表3】二神氏



実線の矢印は直接の相続と思われるもの。点線の矢印は間に数代はさんでの相続と思われるもの。



## (二) 二神氏と村上氏

既述のように、天文期の河野氏の分裂が島嶼部転換のターニングポイントと考えられるわけであるが、ここではこの内乱に二神氏がどう関わっていったか詳しく見てゆきたい。

先に示した、天文の内乱の様相を示すとされる「彈正少弼通直御下衆少々記焉」に見られる二神姓の人物は、「難波衆」の隼人佐・孫右衛門・新左衛門・和泉守・越後守・修理亮の六名である。このうち隼人佐・孫右衛門は先に見たように、片山流の中心人物と考えられる。このように片山流の中心人物の名前が見られるにも関わらず、天文年間に本島流当主であった弥五郎の名がここにはない。片山流は天文期の内乱において通直方についており、本島流は晴通方についていたのではないだろうか。天文十一年（一五四二）、本島流当主弥五郎へ晴通から安岡・宮前・友包を安堵され、その三年後には通直から同地を還補されている事からすると、弥五郎は当初晴通についていたものの途中から通直方へ寝返り、その際晴通から安堵された領地を没収されたが、その後に還補されたのであろう。

とするならば、この弥五郎に対する天文期におけるまとまった安堵・宛行は、政権に復帰したばかりの通直による本島流懐柔工作と解釈できる。河野氏当主に反旗を翻した勢力が制裁ではなく逆に厚遇を受けており、ここから守護権力の弱

体ぶりが伺えるのだが、そのみならず、守護に自立的行動への危機感を惹起せしめる点にⅠ期およびそれ以前の忽那氏との類似を見ることもできよう。

一方、先の「彈正少弼通直御下衆少々記焉」において片山流の面々が得居治部少輔を中心とする「難波衆」に所属していることから片山流が陸地側の勢力に組織されていた事が伺える。少々時代が下るが、『予陽河野家譜』によると天正元年（一五七三）、伊予国人大野氏が長宗我部方について謀反を起こした際、この討伐に二神氏も動員されているのであるが、そこに名が見られるのは隼人佐・孫右衛門・越後守であり、やはり片山流と思しき人物ばかりである。本来島嶼部にいた片山流であったが、対岸地域へ移動することによって使役されやすい存在になるという、Ⅱ期以降の忽那氏と同じプロセスで河野氏への従属度合を高めていたのである。

さて話を本島流に戻そう。先に忽那氏との共通項を見出せば本島流であるが、忽那氏にはなしえなかったことも行っている。それは守護権力への介入である。戦国後期、能島・来島両村上氏や平岡氏のような河野氏に従属していた領主層が弱体化した守護権力の中核において力を振るうのであるが、本島流二神氏にもその徴証が見られる。

【史料6】二神種康書状<sup>92</sup>

なをく御ちんへもさかなをもたせ候て、かしまへの人も  
われらより上申候、甲山ゑもしをさかなやり申候、このよ  
し修理殿へも□□申候、又それへもめはるかす十九進  
候、武吉への人舟おもさくしつわたし候、くハしく新兵衛  
へ申候、又申候こよミをうつし候て給候、又□月廿五日  
わざと申す候、そこもと御番二ゆたんなくかんやう二候、  
すこしもゆたん候てハ、くせ事に候、又あこゝゑもちきや  
うの事たのミ入候儀ねころ申わたされそろするきかんやう  
に候、しんかいあこゝをよくくたのみ候て、せんととのな  
りに申候事わりのきわいつれくきんとわたりそろす間、  
申へく候のよしあもしゑ申候、ゆたんあるましく候、ひん  
きいそ候間、あらまし申候、恐々謹言

二かみ左馬助

三月廿八日種康（花押）

（ウハ書）

【墨引】

「弥五郎殿まいる」

この書状の差出の二神種康は、左馬助の官途から藤二郎（左馬助）か弥五郎（兵庫助・左馬助）の事と思われるが、文中に見られる能島村上氏の武吉の生没年（一五三三？）一

六〇四）から後者である可能性が高い。とするならば、文中の「修理殿」は修理進、宛所の「弥五郎」は弥五郎（相生）に比定される。この書状から読み取れることとしては、①種通は鹿島へ「上申」したこと、②能島の村上武吉と交流していたこと、③弥五郎は現在「御番」に当っており、種康の元にはいないこと、④種康は弥五郎に対し、知行のことについて「あこゝ」を頼むよう言っていること、などであろう。

先述の通り、このころ鹿島は村上通康の子、得居通幸の支配下にあったと思われる。そこへ①のように種康が「さかな」を進上し「上申」しているということは、来島村上氏に対し本島流二神氏が何らかの口入を求めたと解釈できる。宛所の種康という実名が、通康の偏諱を受けたものであるという憶測も十分成り立ちうる。

②の武吉との交流については、先述したとおり二神島の年貢の内に能島村上氏の取り分があった事と関係しよう。天文期の弥五郎（種康）が河野氏より大量の安堵点宛行を獲得した裏には、①と②に示されているような両村上氏との関係が前提となっていたに違いない。

④の「あこゝ」について、西尾和美氏は河野通直（牛福丸）に近侍していた二神氏出身の女性であると述べている。種康はこの「あこゝ」を通じて所領の便宜を図ろうとしているのであろう。両村上氏のバックアップのもと本島流二神氏は身

内の人物を河野氏当主の近くに送り込んでいるのである。

### 〔三〕村上通総の謀反と戦国の終焉

永禄十年（一五六七）に村上通康が死去する。<sup>(9)</sup>その後、来島村上氏を継いだのは通康の子で通幸の兄弟にあたる通総である。この通総は家督継承直後の元亀元年（一五七〇）に河野氏と幕府の仲介役であった梅仙軒靈超の所領を侵すなどして、反河野の態度を明らかにしている。<sup>(10)</sup>【史料5-a】【史料5-b】の第一条に通総と対面せざる旨が挙げられていることから、これがこの謀反に関連して出された文書であると考えられる。とすると、この文書の本来の受け取り主は通総と深い関係を持っていたと想定される本島流の可能性が高い。つまり【史料5-a】の方がもとの正文に忠実に写し取られたものである。第三条以下に続く方々の所領の宛行は、かねてよりの関係から本島流を勧誘する可能性のあった通総に対して先手を打つためだったのではなかろうか。なおこの時の二神氏の去就については知る事が出来ない。

河野方と来島村上方は一旦は和睦するのであるが、天正一〇年（一五八二）四月、通総は再び鹿島の得居通幸と共に反旗を翻す。この謀反に際し、通総は河野氏・能島村上氏・毛利氏と軍事衝突を起こす。<sup>(11)</sup>翌年の始めごろには来島は陥落したようで、天正一一年三月には通幸の勢力圏である鹿島・恵

良城へ戦場が移ることとなる。<sup>(12)</sup>

さてこの天正一〇年の謀反に関しての、本島流の二神修理進の動向が伺えるのが次の史料である。

【史料7】二神氏文書案（A）、「D」の記号は筆者によるもの）

#### 〔A〕

今度通総頼婦之儀、祝着此事迄候、為祝儀神宮寺併可申談之趣、雄城肥前入道可申也、恐々謹言

（天正一二年）十一月十日

義統

#### 二神修理進殿

#### 〔B〕

近年在国之儀令存候、然者分国中津々浦々万雑公事、如前々免許聊不可有相違候、恐々謹言、

二月十五日

義統

#### 二神修理進殿

#### 〔C〕

藝州警固并務司衆数艘相催、至大嶋取上候折節、味方雖無人数、被見懸下り立、被合鎧之段、誠二以無比類候、向後弥有辛勞可被抽忠節之状如件、

天正十年五月十九日

通昌

## 二神修理進殿

〔D〕

去ル廿七日藝州警固并務司衆、於大浦之鼻大勢取上候處、二神主殿助同前下り立、能嶋同名村上次郎大夫被鎧合、剩味方手負共教人引取之段、誠以無比類候、向後以静謐之上、可感恩之状如件

天正十年六月晦日

## 二神修理進殿

通昌<sup>（17）</sup>

〔C〕と〔D〕の通昌（通総から改名）より修理進に出された感状によると、二神修理進はこの合戦の際、通総方として、「芸州警固」（毛利配下の水軍）や「能島」（務司衆）（能島配下の衆）の軍勢と大島や大浦之鼻で戦っていることが伺える。また、同年十一月に毛利氏が来島勢と忽那島で戦っているのだが、これは本島流二神氏と来島村上勢が共闘していたことを示唆しよう。

かつては能島・来島両村上氏と交流のあった本島流であったが、このころには河野側についていた能島村上氏との関係は険悪になっていた。能島の村上元吉は天正十年二月、通総の謀反に先立って、忽那七島に対し警固の禁止や百姓の出入りを禁止しよう命じているのだが、本島流の動きを牽制す

る狙いがあったに違いない。

合戦は来島側に不利に動いたようで、通昌は伊予から退避している。通昌はその後、豊臣秀吉を頼り、天正十二年に秀吉が毛利に対し通昌の帰国できるように求めた。毛利氏は当初通総の帰国に反対であったようであるが、両者の力の差は歴然としていたがために、翌十三年毛利氏はやむなくこれを認め、通昌帰国が実現する。それに際して大友義統から二神修理進に出されたのが〔A〕の大友義統書状であろう。親豊臣勢力として知られる義統は通昌帰国を支持しており、その繋がりでは本島流二神氏とも交流をもっていたのである。河野氏に反逆した本島流は、その代替として隣国の大名である大友氏を頼ったのである。〔B〕の「国分中津々浦々万雑公事、如前々免許」から、二神修理進が大友氏領にも海上ネットワークを持っていたことが伺える。

かくして戦国末期、自立的な動きを見せた本島流二神氏であったが、これ以降、目立った動きも無く、近世移行とともに帰農する。秀吉による「海賊禁止令」について、海上軍勢力を持つ領主を大名や代官のもとへ吸収させる目的があったと中野等氏が述べている通り、統一政権の出現によって陸の領主の勢力圏をまたいで動く自立的な海上領主というものは過去のものになってしまったのである。

# おわりに

以上、忽那氏・二神氏という、室町期から戦国期にかけて忽那七島において台頭した二領主について述べてきた。両者に共通して言えるのは、河野氏への従属度合と道後の対岸地域との関係である。島嶼部に本拠を置いていたころの忽那氏や本島流二神氏が自律性を保ち、河野氏にとって脅威となりうる存在であったのに対し、対岸地域に移動した後の忽那氏や片山流二神氏は河野氏に従順かつ使役しやすい存在であった。すなわち、島嶼部領主の自立性はその立地を必要条件として成立していたのである。無論それのみではなく、その立地を生かした海上ルートの開拓や、他勢力との独自の交流といった因子もそこに付帯していたに違いはない。しかしそれらも島嶼部という立地を前提として為しえることであろう。

網野善彦氏は「人の通った跡をほとんど残すことのない柔らかな交通路」としての中世水上交通路の実態を解き明かしている<sup>④</sup>。その一方、山内謙氏は島嶼部に造られた海城が簡素な縄張りしか持たないにもかかわらずその防御性能が高かったことに注目し、海城においては周囲を囲う海が主要な防御施設であったと述べている<sup>⑤</sup>。自身にとっては自由に航行できる道となり、外部者にとっては強固な障害となる。そういった海に囲まれているという地理的条件こそが、島嶼部領主の

何よりの強みになっていたのである。

(1) 山内謙「鎌倉幕府の成立と伊予の御家人」(『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』愛媛県史編纂委員会 一九八三)

(2) 網野善彦「史料紹介 伊予国二神島をめぐる二神氏と二神文書」(『歴史と民俗』一一九八六)

(3) 室町期以前の忽那氏については、岡田政男「中世海賊衆の形成と伊予国忽那氏」(『岡山史学』二三 一九七〇)、浜田浩「伊予国の島嶼部土豪忽那氏と海賊衆の形成」(『法政史学』三七 一九八五)、景浦勉編『忽那家文書』解説篇(伊予史料集成刊行会 一九六四)、同「忽那氏の活躍」(前掲『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』)などの研究がある。

(4) 山内治朋「南北朝・室町期忽那氏の守護河野氏従属について」(『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』一二〇〇三)、小林可奈「伊予守護と忽那氏」(『史草』四九 二〇〇八)

(5) 二神氏および二神島については、注2網野氏論文の他、菅菊太郎「二神島の研究」(『伊予史談』一八四 一九三二)、景浦勉「室町期における二神氏の活躍」(『伊予史談』一八三 一九六六)、同編『大山積神社関係文書』解説篇(伊予史料集成刊行会 一九七七)、宮本常一「瀬戸内海の研究Ⅰ」(未来社 一九六五)、同「私の日本地図4 瀬戸内海 I 広島湾付近」(同友社 一九六八)などの研究がある。

(6) 前掲注5景浦氏著書解説篇

(7) 『予陽河野家譜』によると教通は長禄元年(一四五六)に弟通秋を養子とし、これに家督を譲るも、通秋は寛正五年(一四六四)に病没し、その跡を教通の子通宜(刑部大輔)が継いだと

ある。一次史料を見てみると、寛正年間に教通に代わって通秋が文書を発給している時期が確認できるも、その後まもない時期から明応期まで発給主体は再び教通になっている。また、寛正五年以降の史料にも通秋の名が記されているものがある（『愛媛県史 資料編 古代・中世』（以下『県史』と略す）一四四九号 大野系圖、『正任記』）ことから、教通は何らかの事情により一時的に家督の地位を通秋へ預けていたと考えるべきだろう。

(8) 『県史』一二四三号 明照寺文書

(9) 『県史』一二五六号 淀稲葉文書

(10) 『県史』一二五七号 萩藩閥閥録

(11) 『県史』一二六八号・一二六九号 長州河野文書

(12) 『県史』一二七六号 小早川家證文

(13) 石野弥栄「戦国大名河野氏と応仁の乱」『国史学』九五 一九七三

(14) 『県史』一二七七号 忽那家文書

(15) 前掲注4 山内氏論文

(16) 『県史』一三九六号 忽那家文書（本文書は年次不明だが、忽那次郎左衛門尉（通賢）が宛所となっていることから、応仁の乱以前の文安～寛正年間ものに比定できる）

(17) 『県史』一四一七号 忽那家文書

(18) 川岡勉「中世伊予の山方勢力と河野氏権力」『愛媛大学教育学部紀要』第Ⅱ部人文科学三六 二〇〇三 のち同『中世の地域権力と西国社会』清文堂 二〇〇六に収録）なお「山方」とは、島嶼部の「島方」領主に対して陸地の国人領主層のことを指す。

(19) 『県史』一四三九号 忽那家文書

(20) 『長祿寛正記』（『愛媛県編年史 第四』愛媛県編年史編纂委員

会 一九六七 以下『編年史』と略す）

(21) 山内譲「教通と通春―伊予河野氏と応仁の乱」上・下（『伊予史談』二八二・二八三 一九九一 のち前掲『中世瀬戸内海地域史の研究』に収録）山内氏は寛正六年（一四六五）二月十六日の河野通春・同通生寄進状（『県史』一四〇二 善應寺文書）をもって両家講和の根拠としている。

(22) 『県史』一四〇六号 吉川家文書、一四〇七号 小早川家證文 など

なお、勝元による一連の軍事催促状において、討伐目標とされているのは庶子家であるはずの通春のみである。これは前掲注13石野氏論文にあるように、通春と勝元がまだ友好関係にあった長祿三年（一四五九）ごろ、勝元の意向により通春が伊予守護職に任命されたことと関連すると考えられる。勝元は、河野氏本流は教通ではなく通春だと認識していたのだろう。

(23) 『県史』一三九八号 安藝楽音寺文書

(24) 前掲注18 川岡氏論文

(25) 両家譜とも典拠は『編年史』。以下同じ。

(26) 『経覚私要鈔』『応仁記』（『編年史』）

(27) 『県史』一四七〇号 明照寺文書

(28) 『斎藤基恒日記』（『編年史』）

(29) 『県史』一三六九号 大友家文書録

(30) 長山源雄「応仁の乱と河野氏の向背についての再検討」（『伊予史談』一〇二 一九四〇）

(31) 景浦勉編『河野家文書』解説篇（伊予史料集成刊行会 一九六七）

(32) 前掲注13 石野氏論文

(33) 前掲注4 山内氏論文

- (34) 川岡勉 西尾和美『伊予河野氏と中世瀬戸内世界』(愛媛新聞社 二〇〇四)
- (35) 『県史』一四三三号 忽那家文書
- (36) 『県史』一四三四号 忽那家文書
- (37) 前掲注34川岡氏・西尾氏著書
- (38) 山内譲氏も注21論文補注で指摘している通り、文明九年三月付け石鉄蔵王権現宝殿碑銘に通直(教通)・通春・通生が名を連ねている事から、通春はこの頃既に帰国していたものと思われる。
- (39) 『大乘院寺社雜事記』『経覚私要鈔』『宗氏世系私記』(『編年史』)
- (40) 『予陽河野家譜』(『編年史』)
- (41) 『県史』一四四〇号 築山本河野家譜
- (42) 『県史』一四四一号 築山本河野家譜
- (43) 前掲注21山内氏論文
- (44) 前掲注30長山氏論文
- (45) 前掲注21山内氏論文
- (46) 前掲注34川岡氏・西尾氏著書
- (47) 『県史』一四四二号 築山文書
- (48) 『県史』一四四九号 大野系図
- (49) 前掲注4小林氏論文
- (50) 『正任記』(『編年史』)
- (51) 『高野山上藏院過去帳』(『編年史』)
- (52) 『県史』ではこの時期に宛所となっている忽那新右衛門を通光に比定している。これは通光の通称が新右衛門によるものであろうが、「忽那系図」を見ると通光の次の当主の通乗も新右衛門を名乗っている。文明一三年(一四八一)の石手寺棟札(『県史』一四九六号)を見ると、本堂再建にあたって木材を提供した人

物の一覧の中に「忽那伯耆守殿」の名前がある。系図上伯耆守を名乗っているのは通乗のみなので、文明一三年時点で既に通光から通乗への代替わりがなされていたと見るべきだろう。

- (53) 山内治朋氏は前掲注4論文において、東浦検断職を河野氏が安堵するということには、忽那氏当主としての権力を河野氏が保証する意味合いがあったと推定している。

- (54) 石野弥栄「守護と国人」(前掲『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』)なお、この代官職安堵状に「任先例早知行」とあることから、直轄化の時期はこの安堵状の年月日を多少さかのぼると思われる。

- (55) 前掲注4山内氏・小林氏論文 両氏とも忽那氏が伊予本土の対岸地域に多くの所領を宛行なわれていたことをもって対岸地域進出の根拠とする。

- (56) 『県史』一五六六号 忽那家文書

- (57) 山内譲「クダコ城の遺構と久田子衆」(『伊予史談』三〇〇一九九七)

- (58) 『県史』一六三二号 三島家文書

- (59) 『予陽河野家譜』(『編年史』)

- (60) 『予陽河野家譜』(『編年史』)

- (61) 天文九年の襲来については『秋藩譜録』(『県史』一七〇五号)、『白井文書』(『同』一七〇六号)、天文十年の襲来については『忽那家文書』(『同』一七一一号)、『白井文書』(『同』一七二三号・一七一四号)

- (62) 景浦勉編『河野家譜 築山本』解説篇(伊予史料集成刊行会 一九七五)

- (63) 川岡勉「戦国期における河野氏権力の展開」(大阪大学文学部 日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂出版 一九九

八)

- (64) 寺川仁「戦国期における守護大名河野氏と海賊衆村上氏―来島騒動の検討を中心に―」(『瀬戸内地域史研究』八 二〇〇〇)
- (65) 川岡勉「天文期の西瀬戸地域と河野氏権力」(前掲『中世の地域権力と西国社会』)
- (66) この文書に列挙されている人名を一覧表にしたものが『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』に掲載されている。また、これとほぼ同文の文書が「高野山上藏院文書」に「彈正少弼通直家頼記」として収められている。(山内治朋「史料紹介 高野山上藏院文書について(下)」(『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』一三 二〇〇八) 一三六号)
- (67) 前掲注54石野氏論文
- (68) 『県史』一七一号 忽那家文書
- (69) 山内譲「海賊衆来島村上氏と海城―伊予国鹿島城の場合―」(『日本歴史』五五七 一九九四)
- (70) 前掲注57山内氏論文
- (71) 西尾和美「中世伊予河野氏の婚姻関係と「予陽河野家譜」」(『松山東雲女子大学人文学紀要』六 一九九八)
- (72) 前掲注4山内氏論文
- (73) 「二神文書三」「二神文書四」に関しては前掲2細野氏論文史料篇に翻刻されている。『県史』には掲載されていない。また、煩瑣になるのを避けるため【表2】にもこの2巻の文書は載せなかった。
- (74) 前掲注54石野氏論文
- (75) 『県史』一七七三号 二神文書
- (76) 前掲注5景浦氏著書史料篇(以下、同書の史料番号を示すときは『大山積』と略す) 二二六号

- (77) 『大山積』二三九号 二神文書
- (78) 『県史』二二四四号 二神文書
- (79) 『県史』二四一〇号 二神文書
- (80) 前掲注2網野氏論文史料篇 五二号
- (81) 前掲注2網野氏論文
- (82) 前掲注2網野氏論文史料篇 四〇号
- (83) 前掲注2網野氏論文史料篇 四六号
- (84) 『県史』一八一四号 片山二神文書
- (85) 『県史』一七八二号 二神文書
- (86) 『県史』二二〇六号 二神文書
- (87) 『県史』二二〇七号 片山二神文書
- (88) 『県史』二二一〇号 二神文書
- (89) 『県史』二二〇九号 片山二神文書
- (90) 本島流において、道金から惣領跡を継いでいる式部丞なる人物が見える。景浦氏は前掲注5著書解説篇において、この人物が本家と別系統の家の惣領職を継いだ可能性を指摘している。仮に道金というのが四郎左衛門尉の法名であり本島流の惣領が四郎左衛門尉(道金)↓式部丞↓藤二郎(左馬助)と相続されたと見ると、年代から見ても無理が無い相続順に思われるが、断定する証拠が無いので景浦氏の推測に従って別系統として図示した。
- (91) 得居氏は風早郡難波郷を本拠としていた、河野氏傍流の一族。
- (92) 『県史』二二四五号 二神文書
- (93) 前掲注34川岡氏・西尾氏著書
- (94) 宇田川武久「戦国末期における伊予海賊衆―来島通康の没年を正す―」(『国学院雑誌』七四・四 一九七三)
- (95) 川岡勉「戦国織豊期の伊予と河野氏権力」(前掲『中世の地域



権力と西国社会』川岡氏は村上通総の謀反の原因を、このころ河野氏が村上氏と懇意だった三好氏と断交する態度を示したことに求めている。

- (96) 村上和馬「瀬戸内海と水軍」(前掲『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』、得能弘一「戦国期における海賊衆村上氏の動向―天正年間前半を中心として」(『政治経済史学』三八三 一九九八)村上氏は元亀二年に講和がなつたとし、得能氏は天正四年には講和がなつていたとする。

- (97) 『県史』二三〇九号 屋代島村上文書、二三三九号 因島村上文書、二三一四号・二三二三号・二三三五号 萩藩閣閲録

- (98) 『県史』二三七二号・二三七三号 萩藩閣閲録

- (99) 『県史』二四四〇号 片山二神文書

- (100) 『県史』二三五六号 屋代島村上文書

- (101) 『県史』二三〇二号 吉木二神文書

- (102) 山内譲「河野通直(牛福丸)の時代」上・下(『ソーシアル・リサーチ』四、五 一九七五、一九七六)

- (103) 中野等「いわゆる「海賊禁止令」の意義について」(九州国立博物館設立準備室共編『東アジアの海域における交流の諸相―海賊・漂流・密貿易―』昭和堂 二〇〇五)

- (104) 網野善彦「中世前期の瀬戸内海交通」(大林太良他『瀬戸内海の海人文化』小学館一九九一)

- (105) 山内譲『海賊と海城 瀬戸内の戦国史』(平凡社 一九九七)